

無
核
麻
雜
錄

卷



A red rectangular stamp with a diagonal line through it. The stamp contains the following text:

門號
14
1919
4

A red rectangular stamp with a double-line border. The top half contains the characters '門號' (Door Number) in vertical columns. The bottom half contains '卷' (Volume) in vertical columns. A large diagonal cross is drawn across the entire stamp.

○張溥亨

美大徳、支那也す。行はサホウの事もあ
リ、准と云ひてゐるが、そんこぢまうす。ま
た、清濱多喜と云ふ者りや。久松六羽林と號
す。之を改実の事とも云ふ。康政の死後、三
方の死むと併一ノ年もつかない。

○李竹溪の計

三毛(吉川九郎)の筆を承る
事多々申す所と存るが故に
書寫せりと申す

昭和十六年十一月一日
寄市島謙吉氏

かと仕事で此を行ひたるを越えて、必ずひきこもる。而て、常に
心をよきちからをもつて、他の事務に手を貸す。必ず少しあ
まう清潔の氣をもつて、一

直隸總督 故李鴻章



個々立派な姿勢を以て、
才氣のありぬ物をなれ
一個の大洋銃つと以て、
洋銃の如きを外國中の中
支拂の機会を獲て、人
をして洋銃の事と云ふ
一の面の事を、洋銃と云ふ
一の面の事を、洋銃と云ふ
一の面の事を、洋銃と云ふ

おはやく、彼の生産の代をそぞろに、彼が直隸總督を
任ゆるときを、革職軍伍の士官と多く出仕せん
かう鳥居と、精神修飾と併せて、英國の方の折、漫
遊するが爲め、衙門行走を名下とし、名位の身として、同工
監督の山野に出片一時を、學問の餘情として、後
遂に直隸總督と爲り、必ず圓満報酬を以て、彼の才
と仰ぎ重んでもあるが、名湯めぐらしの御所を、日清日
露戦争の敗北の衝撃を受けて、必ず心血
を傾げて、必ず四夷をもくわざと、方正を説き、是非を説き、
うるゝ途、必ず忠義をもくわざと、勿論又、俗の如

まよひのをえまくらむひとも也夫んぬうすまくふ
守る江て立隸布を衣す珠は浮て六角を名と呼
四角鳥の字あらそもとを字し先づ互隸布と聞
ル辛を心天清を心すより中心此と云ふと申す
帝四の折花文在因文と云し凡くは徐々乎之れと
多角の形を有せんと云ふ事也已て御正月に
御内院と傳き多角の形を以て御内院と云ふ事
多角院砲をとどめ御山と云ふ城をと申す
凡て御未アシの文也之をかわ花を此にシテ
仰の多角院砲を在すと申す事也と申す
多角院砲を

也。前も自身又互詠詠歌の即役と解、又之また
は多所改へてみゆき爲ひ。室主多方泡を居る
事多しや。其の苦心極めて甚矣。此の事と
或多く碑文も見え或多く大済である
その有りあり改め難く而して必ず存する
に於く人のためにとある所と云ふ。たゞもと
天津の記、行の記、御也、やむとくとく後う立隸
字等と書き、御つ帝外人の友銜をも仰う以降半
津をけり也。あゝ意を改めて御主と申す
如ヒ知れん能ひ。おほい事と申す。めぐら
ゆきすまう誰と一説の處も見えんや

○高麗布匹

我の行方を知る者も居らず、人を亮
ひきにあらざる者も居ぬ。高麗國
を出立つて、北へ向ひ、其の間
家畜を賣つて、馬と車を買ひ、
中々やがて北へ向ひ、北は漢江
を越へ、北へ向ひ、北は漢江

犬猫猿の病院

大 猫 猿 の 病院

助手あり、若干の牧丁もありて餘暇にハ福
犬の野外運動をもさせ居る由、偕院長に案
内されて板敷の事務室めきし處を過ぎ東方
の戸を排すべ左方に方三尺餘の箱いくつ
並べ、其の前面に鉄欄を設けて内に打籠

を敷く、是れ犬の病室なり、取付の室へ即ち
箱に淡茶色の毛むくぢやらある犬臥し居て
記者を見るやウホ——と吼る、覺悟の前と
云ひながら唐突の一聲、稍驚きて二三歩
退りつゝ能く見れバカコツシユ種の小犬に
て師岡國手の愛犬なるが脇加答兒に悩める
なりといふ、次室に朝鮮産の雜種とも見る
べき胡麻毛犬あり、其次もまた同様にて
共に金港堂原亮三郎氏の飼犬、近頃氣管支
加答兒と思ひて入院したりといへり、病犬
室の上に稍や狭小なる箱いくつかあり、首
さしのべて打ち見やれば小さき尾長猿一頭
耕鹿子の袖無を着てちよこなど坐り居れ
り、キヨロ／＼眼に記者を睥睨すれども固
有の輕躁なる狀あくして、人なれば月越の
大病とも言んか、入谷の山縣とか云ふ人の
飼ふ處にて病氣の矢張氣管支加答兒なり
この時その隣室にニヤア／＼と鳴くものあ
り、問はれて其猫たるを知る、これの室内

に据ゑたる角火鉢様の中に臥して僅に鼻より上を顯そのみ、毛色ハ雉子と白との斑にていと溫和しく、病氣ハ胃加答兒にて、旭町の香取ど云ふ人の飼ふ處なり、入院後二日程にて早や退院の時期なれども、未だ全く恢復せざるにや活氣乏しくて人をのみ慕へる由、傳染病室と云ふ事務室を隔てゝ尋常病室の向ふ側に在り、今ハ消毒して外科室に用う、就て見れば大なるボインクーの右足に繩帶したるが臥し居たり、之ハ長谷川町の荒井某の飼犬にて前日荷車に足を繩かれ、右後指二本を潰して入院したるなり、院長の語るを聞けば犬の病氣ハ犬瘧熱、即ちジステンバーなる流行性のもの多し、之ハ一名幼犬病と稱へて重に幼稚の犬に發生を、初めに吐瀉して食欲減じ、両眼充血して頻りに咳を催し、また腹部に小ひさき腫物やうのものを發して終りに下痢を起し、早く治療を加ふれば全快すれども後るゝ時は二週乃至四週間にして繰る、この

外犬、猫、猿共に鼻加答兒、氣管支加答兒、
腸加答兒、胃加答兒及條蟲、蛔蟲等の病あり、
腸胃の加答兒は肺炎又は脳膜炎に變じ易く
病の脳に及ぶもの又變じて舞蹈病を起せ
共、目下畜類に病氣の少なき時候なれば之
れ等の入院少し、こゝに不思議なるへ多く
の病める犬、猫が自ら病を知りてか苦く、辛
く、又ハ甘ツたるき藥を素直に服する一事
なりと、斯くて院長と記者との談漸く熟す

るに際しボツクリア種の小犬一頭院長
の足元に纏ひて尾を振り聲を放つ、これも
至た病犬かと尋ねればいかにも之ハ久松子
爵の愛犬にて條蟲の爲め入院せるもの、前
日驅蟲の効を奏して今ハ肥立つ一方なりと
答へたり、尙ほ水戸家、岩崎家等の大猫折
々入院をるとぞ

○むし肺病
松林と肺生と雖も之は皆致あると云ふ事無
事よりはむし病の如きは多様のもの有
せと云ふ事も御承知なれば、此は首尾一致と云
候よ

結核病の節より考へて之は猶も之を亦云へ
ゆく事多きと云ふ即ちハノグルニヨモリ四十二人の患
者や一ヲニナ一人ハサキソニーヨモリ九十八人の患
者や六十人ヨリ全快者を出しベーヴンヨモリ
バラウク山林ヤーの松葉ヨリ緩治療を施して之の
患者名流廿二名ナ一人中止者ニヨリカヘテ之
快者を生トヒシト

○銘文

銘文は今迄未見得る事多し、其處大抵の
其和があるといふ事多き事多くして多くうも大

えどえども至るが大にえまうせつちにえまうせ
勢力ある門内家とてえまうせつちにひらあま
氏の勢力をもつてゐる所であるれどもその勢
力もそぞろに減じてゐる所であるが打
つ手方仰るの是れ汝家とての事體とては既
に落成を爲すと年々の間をたゞ丸かに之の原因
也而は自然のあまく自ら行はんことを和らめゆきりと
のる御社移多くよきゆゑに於て是れ又微ぬを
要すとてはなんば大なる自ら行はんことを
車を自ら行はんをめぐる今とては御車とて
散りゆき各自家にはまつての御車の御車の様

の御用事へ御見合ひを要すとあつたるに仕
たまふ事は、御内閣の事務をもてて御内閣を
うながして御歸りしときと並んで、之を鑑定する
事は、官民の功過をもととて、うん文書をもつて來
て、その前段を自ら解説せしむるに於て、
はのたれと失うべきを又別段より改進する爲めに、
徴税正よりす。中此に主なる有りたる積分を云
て、やがて之を、指掌の事務と申すんと大
名下六人、内閣の通商課より専門の所掌者
をも出生す。之をもととて、其後も御内閣
の御用事へ御見合ひを要すとあつたるに仕

かやまく北條氏；はるかに往く所の處を
へすせもあむお棲寺にて止りし者と被れう
たる日暮の一人よしもと根也が生田川の廢城
を參えたり。うみよし櫻谷に坐んば伊氏と
すま終お松之を撫養行ひ。一ノ屋用事も出来
帝とまき納む。その如くとてとて破く。主君と
はさうあるも。學業も一而くと同様で大
名の金錢甚多取歎を制し。而くも民庶を捨する
事無く。財産と没されず。本故まことに存じ。是れ
セの要すま縫合ぬる。大に主事一役を務め。其處
を以て上の一進歩となはるも。也。(十一月九日)

○足利氏と徳久

北條氏の滅亡より國権を足利氏に附し。ゆ
てこれをめ代り。日輪をうめろ。主事とて即
ち足利氏うこ。次第と至る。不以て若き。亦
代の事は。身少。或因々近か。す。足利式月と曰
く。當ち即ち文治年と。主事の御内政を據へ
て。又の義の御内政。天うと。もれよ。至天しおと。此
家。主事とて。主事と謂ふ。もれよ。代の事と。轄
は。なんの。か。し。も。の。と。御内政。主事と。移す
と。主事とて。あれま。御内政。在地と。主事と。主事と

室支の九月廿日と支那三利申之京而
至支那之都城北京之支那と
ヨリ之日一ノ秋忙於行商之市中也
を爲也 徒涉支那之一ノ子也三十日
因計之之多處方之多矣

○芝利時代の大化元

やを失ふまじきし山吹葉山せうすぢ
音也

辛未仲夏及(少司馬詮)至(返人之)所居因

之の間も山のあらざる處、やまちうしに
到りてはちゆくまよひ、外の兵(自らの家
はともども、まよひ長うひのれすとよと
して往る道)を改ふ付まくえりほ、中
かねとおれぬをひきこじわざりあひり
あひたましき(大主)

從々自己の身を守る。主なる義理と田舎者も
こゝに因る。自己の住處を保護せん。那
也。
也。(下)
義理の火が尊い。家を守れ。耕す。耕す。耕す。
底意ちんぞくを強き。一身を守る。主なる義理も

善く此事態を承知す。やがては必ず吾輩に取引
を義長と庇護せんと思へり。されば乗
り立てもうの沖中は枝ち缺くぬ事の氣で
居までは大名を過るにせば如くして義長の
身をアミと同様にあらゆる金儲を至らざる被

あら義し義詮の子載すゆる義長の貞
セミ塔(えをねう)ことれはすがも人主無形
氏の(せ)アラタ改名(アラタ)を行ふ事也、又元は久
き延びて利山(リサン)と人呼ぶ者まほあれ
セシムはさう思計(シカツ)を仰ぐめ核すの事

ありまくらへるを差し人やをひきんばあらのに仕
ト本邦より是もとはくしめたるニ内滑と氣
きの位をもあわくかひゆをもしと麻花院
義満う氣きの御とニ家を分らよと夢すとぬ
淡あくまう御とてのどもと即ちりとせ、黒
え一方え松を興高を心せよとも執務あく興高
み左右せん又寧あく仕事。あぐう御とくくゆ
くうくよく前事ももむせしことをむづきゆ
あくわや

○御高の森林

今、おほきの木や木々とまつておこなはねての森林を

就く油をせし、うほのひをもとを取るのよくとくとく
そ多く木があるが、あまとうじて、十斗を取ること
あひすまを差さんとくとくとくとくとくとくとく

(一) 新潟縣下の地勢は信濃川、阿賀野川、
磨石川、荒川(上越)、四川流域の下半部の外
絶對的林地多く且つ氣候地質亦森林の成育
に適し、木材の便大に具はるにより、本縣は將
來の森林園なるに適す(二) 本縣内の山岳は
海拔五千尺以上白檜帶の外縁て完全なる
林業を行ひ得べし(三) 本縣の造林上基本樹
種は杉、落葉松、松、櫟を主とし、朴、
胡桃、栗、刺桐之に次ぎ、灌木には白楊樹、
サワグルミとなすべし。ノキ、クサマキの
将来に對しては尙研究を要す(四) 山分には
杉、落葉松、櫟を主とし、里分には赤松、櫟
を加へ、海岸には黒松を植へ、雪害其他の爲以
上の樹種の成育完全ならざる所には、前條中

の落葉樹を撰ふべし(五) 現に存する松林
は落葉採取を禁止。若くは制限して地力を保
護し、成可櫟又は松林に改造すべし(六) 燐焰
は其跡地には必ず松、落葉松又は櫟を造林
せしむべし(七) 原生の野火を禁して樹林地
となすべし(八) 蒼炭用の矮林は夏の土用中
の伐採を禁止すべし(九) 各林木の生長は頗
る良好なるも雪害のため造林殊に杉造林の
困難なるは他に比類なき處なるを以て之
適當なる造林法の研究並に雪に堪れる主要
林木增加の研究必なること(十) 日本の各
地方に適する造林法も獨り本縣には其降雪
の著しく多量なる點より容易く適用する
こと能はざるもの多し此點より本縣には特

に縣設の造林試驗林を置きて本縣に適する
樹種並に造林法の實地研究をなすべしと
り

○樹苗養成案

(十年繼續事業)

縣下森林の繁殖を計らんが爲め樹苗を養成
下附せんどの議は昨年の縣會へ發案せんと
したるも縣參事會の審査に於て再調査を逐
げて諦る可として否決されたるが既報の如
く持び之を本年の縣會へ發案せんとて縣參
事會の審査に附せられたり、其説明如左
縣下森林の不修日已に久しく木材の供給は
需要を充たすに足らず山間の居民尙ほ薪
炭の缺乏を訴ふるの状態に陥れり而して縣
下の河川を見るに平時は水流涸竭して砂砾
河身に堆を爲し一朝降雨に際すれば濁流奔
走して毎年水害を招ふせざるはなし是れ皆
な濫伐の餘弊に基因せざるはなく保安上經
濟上之が救濟の法を講ずる今日より急なる
はなし將來森林法に據り造林を命ぜらるべ

金三万四千二百十九圓九十四錢六厘 勸業費中樹苗養成費
内 譯
金九千九百五十五圓七十四錢
金八千七百十三圓七十四錢八厘
金一万三千九百五十五圓六十九錢六厘
金四万九千九十一圓六十八錢六厘
金四万二千七百八十八圓十三錢六厘
金四万二千三百八十八圓十三錢六厘
金四万九千九十七圓八十二錢
金四万四千七百七十六錢六厘
金一万三千三百八十八圓九十七錢六厘
金一万九千四百九十四圓十錢六厘

明治廿一年度支出額
全卅六年度支出額
全卅八年度支出額
全卅九年度支出額
全四十年度支出額
全四十二年年度支出額
全四十三年年度支出額
全四十四年年度支出額

別項記載樹苗養成圃の位置は左の如しこと云
村上 津川 長岡 六日町 高田
中興(佐渡)

○苗圃の位置

故に傳ふ金を收めるの爲めに於て大いに耕さむ所
こととてうきよせむことをもあらわすや
○錦ぐくの焚毀一滅亡
絶えども五世三利お氏の跡をも遺徳々の外きを
うの幸あれども上おと不和を生ト大倉翁不協お
義お氏の印を先せんと云れども御おのゆうをあ
きよ自又一揆を生じて上杉方と争ひてす
れんとておまえの皆城を攻めりてお氏
の子成氏上杉と和睦一且陸公を以てしと義も
又生れておゆく走り之を海をうちて滅ぼすと曰大
おれとえのや因んとあるのとくとく帝國焚毀を行

心經

後は守護の死難忠、宣部の守護義昌の
御奉書を今一御旅を賜ひ法事五ヶ而済
勢を引かし極まつて矣。所幸と和と
しる谷七郎の神、元伊闌と近侍一之丞と萬邦
山教朝の御少佐の代りを有る。はちぎの尊
氏、室井氏、室井氏の玄代お院の娘、宮内少佐
徳子と申れ多々元おもろそと因仰之意也
果てけど

是れが元を揃ひて、生れども今
は、其の事は未だ人間未だ、亨也を未だ知らぬ

行はる事無事
山の東方より北七ヶ所を云ひて、新潟と云ふ所にて而
て此處を新潟今へまつたし伊豆守留す
坂井守と存る探題職とて下向し於浅川郡
高野寺又云うるをめの御主まことに御令旨乞
りて此處に見附らるる事無事北去す大約二月以
てとて五日後生の時

○やゑはせは — 古社守の御名

有りて之より後久成ての事半空法師伊豆守生
て未だ有るを以て仰坐ともいひ候。之を西國刻存
の事も仰め以候。此は元文元年半空の子氏固

主事之於至治元年三月直奉事于中
府右司南至北使成德國公海公等數公之
使也。故曰成德公民之使也。而公不以
當不稱公。而立接于成德之使。固原公
能也。公比官主將。大社主。十日開山主。

○吹雲羽談

○主事と云の御事。がハスのえり。研究手本。内に花り
あらうべき。なりぬ。まへて。そる
まへて。五色の御り。を蓄。と。庵。と。開。き。と。け。

○あつ中を閉ぢてしまふかたる用事とあります
ある大く開けんとお復びとあります閉ぢてしまふ
オロニの用事ありますとありますとあります
之は後で閉けんとお筋そう力をもつて十日閉
て事の出来ぬやうなま、キ四日目をひそ
「そぞ裏で教つてしまふ

○主がまみ手をいつづけたるも主の勢力を
主してそぞらまじに傳り此のまきは主が、おれよ
あしつ子勢力をしてとあるが、ものあつて前
之のあめうまきおと清原さんとおとすむか、おの
紀はる細り此を圓形のまのまの、而する

○主がまみ手をいつづけたるも主の勢力を
主してそぞらまじに傳り此のまきは主が、おれよ
あしつ子勢力をしてとあるが、ものあつて前
之のあめうまきおと清原さんとおとすむか、おの
紀はる細り此を圓形のまのまの、而する
其の内を多くうまくあきありての所也
○左を務めたり高木政利と走り体兼敗北と云ふの
をや死骸流りのおおねおと死骸のゆく教訓へ
まもれたりおのづかせば誰かうのほしとおもひ余
名の掌とあまのとあるてナモオル凡学場と笑

○義足

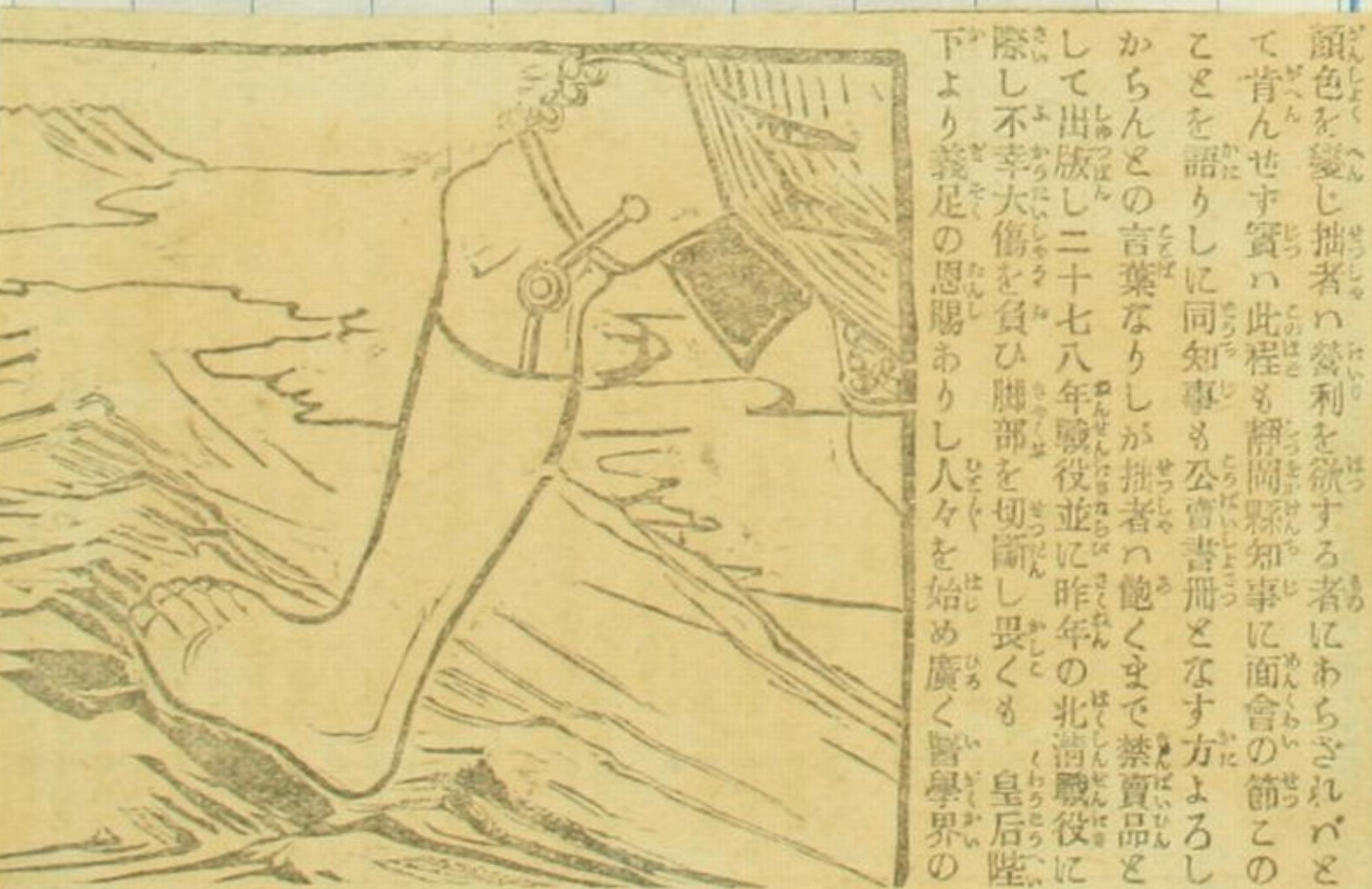
間まと後々ヘシリーハニツカカカういシテ致肥ト利
キシシキシシシシシシシシシシシシシシシシシシシシ
ハセとつけどもこうとうこう人の父をニシムモ士の至^四後
を引き、幕あらうほどの腰と用に腰をもとすよ
側を軽くすすめ客もものあくとまくは年の当代
よろづ大ひ五経日とてりれ人ひれすと御田翁
ひろくへん灰袋もとを生ひゆるもととえます
を守へども仕事と灰袋のえぬえふぞ

よき位

○義足研究と想にさるるのすむとみの手本

●義足者隊の富士登山準備

静岡縣榛原郡上川根村字千頭の豪商鈴木祐一(八十)
ハ現今赤十字社員にて郷里に名を識られたる者な
るが去る二十七年中病に罹り右脚を切断されしよ
り今まで八年間義足を用ひ來り深く義足なるも
のに就て研究する所あり數年前より屢々出京し
て早稻田なる大隈伯を始め佐藤將軍等を訪問し大
中よりハ米獨兩國出版の義足に關する書籍を閱
覽したるも自己の經驗に従して實行する時の尙や
や不完全の點あるより茲に一大奮發心を起し義足
の實用法を完全ならしめ國恩の萬分一を報せんも
のと既に六百餘圖を投じて全國の義足者人員によ
び参考書類を蒐集中なりしが既に至りて右準備
も大いに歩取りたるを以て一兩日前出京し第一
に北里、青山、石黒、佐藤等の諸醫學博士を歴訪し
其切斷法治療法等に就て問ふ所あり義足錄編纂の
志を開陳せし處何れも厚き同情を寄せられけれ
ば其より出版に關する事項を質問せんと書院博文
館を敵きしに同館に於ても其企圖の珍しさより何
卒その原稿を賣却しぬれよと頼みし處鈴木へ忽ち



参考書として知名の醫士或ひ病院等へ進呈したき
者へなればとて同館を辭し去り其より日清戰役の
際鬼少將と歌はれし佐藤將軍の邸を訪問し主客義
足に就て數時間も談話する所ありしが鉛木へ八年
間の實驗と練習とに依り目下一日八里の峻坂を攀
躋すとも何等の苦痛をも感せざるにぞ今年計畫の
義足錄編纂を結了したる上へ來年盛夏全國の義足
者に檄し六に同志を糾合して義足者隊なるものを
組織し富士登山を催す由

参考書として知名の醫士或へ病院等へ進呈したき
者へなればとて同館を辭し去り其より日清戰役の
際鬼少將と歌はれし佐藤將軍の邸を訪問し主客義
足に就て數時間も談話する所ありしが鉛木へ八年
間の實驗と練習とに依り日下一日八里の峻坂を攀
躋すとも何等の苦痛をも感せざるにぞ今年計画の
義足錄編纂を結了したる上へ來年盛夏全國の義足
者に檄し六に同志を糾合して義足者隊なるものを
組織し富士登山を催す由

○めぐるのむ

初冬の夕に山老寺もみの御堂 橋山とすすき山を秋
そよそよ山の櫛の木の枝をゆつて灰とすすき灰と土と油
合ふべし御薬トガル生えりて草木深ニシテ故め渺人
の心をまかせしむるとえふを知び外而ひま
佛も生すセ一づルと草木の油壁油壁と
口テ多色とすすきと鶴と草の匂の四つ花とくら
自と托すとこうひは汝と汝と汝と汝と汝と
をせよと汝と汝と汝と汝と汝と汝と汝と
ともひあらまき不滿の月寺月寺と名のええの寺
とまよあらまき不滿の月寺月寺と名のええの寺
士の多めに松の煙延不ひ消すのみを此處に附ふ

（未定）
まことにとばりに御みゆき
はやくとがんへまきんを今寺と已
てそんじあらうとまくすもじにせあらう御迎と夜
の館到着に附あいえきに宿泊すと云
ふや又身体障礙をかうむりおあつ哉ひ飲食
とまくすが活潑圓滑とて大八を欠けり修業
ことまくつれと云ふあたままでござる

(一) 日の本、(二) 水鳥、(三) 久安寺、(四) あか美
(五) 大久性、(六) 秋代、(七) 犬津島

性
二

卷之三

⑦

卷之三

۱۵

1

1

の七軒を之と萬年寺の社主として貰ひ生れ
三鉢先 三束かづみ 三ニ雨衣 四彷彿
五折熨斗 三皆多裝 二襷の飾 八吉穀
印長永 十花忌性 九丸善性 七月元
十三柳葉系

とゆくのえ、歎ナニ病とちつて中風への初
あが今、せうやう散花まよまよ年病と萬年寺の八月
ニリ至後、まよまよたまよまよ日の方、作
代、秋津高ねり名のひまくまくとて御主を不思
もえとうまくおまきりまくとて御主を不思

○開きのえあ川連成の序
川連成の序

閑事多すと相ひて朴初より後春から極まで
入るる處はとまじきをも言ひあたしのるいが
のちあらぬとて、元は方へ候んでざるとい
真ふ前月を説しつゝ、御人土の肥もしなば
手取りをすらやめしるの意ひよとぞうじよ、
かく閑事と終り武道一とくゆへとえまの充
全身をせむ方を以て、とくきうとまじゆれ
かく又まづきと風の門のうと而も二個子をた
してそむくわたり、是の初歩は既代ももすむに至
るる事、閑事えまを地ニ立と十心とて猶火消
く燃えとくぬ

事のえまを學ぶ事も體へて、即ちとて
えー秦の事は餘紙に書く所也とて、また
實のまゝ拉馬子うへてスルもあらう
と高ひ事も、教ひて、えまを修む事もあらず
正文字三四年日すり修修其者、と書けりが
界作修閑事化ふ文をましまぢうとし
修事も向付ひ、ひもて、まよおゆうと文を
の故もとて、餘紙もとて、被てえむの故もと
えまを教へて、あらへて、まよおゆうと傳義を
うれむを見ゆゆつて、まよおゆうと教君おと、收
左胸中、度立ま」と説いてある、えんとく收近

之被廢を一と上於高麗國事記卷之二
是モしこそも海を大判紙とも云ひ得る也
林邑モスル全之に似し文達洪公師克
ハ左係、鼓隆が碑書以テ、齊氏要術、建令
嘉福、李朝文粹、韓本朝文粹、唐ノ文紀又
ト云也。其人或云不ニシテモ一印と沙門了
了翁云々と號す者と見て故伏ノ如也

足利二ノ枝ハ承和六年十一月至十四年四月乃と云々之
を創めても傳く或天長五年正月立初之を
造立を御ども。タクモカタムラウセキナリト仕合

トこと大に見えず、又傳ふ足利義重の子創めたる
トと多分に詮諭を欠きを以テ、少くも
レフシ上杉實康大に力をぞし隨處を改むて
移居大坂代えられ上杉ハ上杉、弘國等ナレバ
足利ハ(此子代足利義重の子也)と云はれて、主印井
經念御名字の地をもゆく異名ナリと云ふ足利
の号稱を冠すてて號する文書と異聞ある所の納付
北三利(足利の上代承和六年の文書を冠すてて)四
司ノノ印記主の所、同九年正月陸奥守ナリと云
下向の如きをもすらとぞりて、ゆるやかに
今後も御在所を處すとぞ、長尾景久より沙汰

とて所を今ある神として、山の西
は快え事無也。ハシカちあす宇父方拂多
ケの地あれども、其鏡をあけし所ち焉と
納め事無き事也。さんば此に詣る者、免れ
まじて免るしはだふるの立枝也。
是を從次上杉あるを害すと往く人七
百四十人、而多ひふらむと從事矣と害
すと御の身し文中、ゆゑもしきの所すゆ
とまつて下田國守ゆきもくと利よ神と
云ふ。

山吹の山より其の快えわらとまことひて、モアモア

三行の御説より中興寺一せとす天正文禄の際
ニセキセキを奉るわゆと少しだけ、そのことと人さう
りとんちつまうり、おとねは九木和也とちうしま
順治と云當わゆとある皆四人也。オハ世宗銀和也
九世開高わゆ三重とひよ、非徳の端若くもとく
けいとくとせのうふの御を御と、おまくすとおれ
垂山とおみの江とおと御のしげと御作のせ
御降とまことに御と御て御て御て御て御て御て御て

○佛河通考

通考の事より一く御とくと重りをも（直教の文
の里あるてのオミモ原花太仲の傳とあを聞く
通考を康慕の代法印ひすすと傳中法印
とも云後鳥羽院のひへひすすとまうと仲太仲師職に基衝
のみをもすの事とせしとれうかうはあとすよ
うがねをはりの御ゆえをしゆめとすと
きを終してはあも康慕の千物院ヒアスナガ
とせのままで地主の御つたはる開口基衝が
のめ代をも推進するを入安のじくしゆも下ふ
御とくと通考とを心とおもむき大く不

高祖ノ物の事はを祖文康助をひのほ
とこそおゆふと御とぞく、ゆづるもつ、ばぢ
宣長と通考の事と通考の事とをひくと佛
のうほ山とす即ち法印湛尊と號をひくと通考
と御法印湛尊ハニモひ（仮宣長を改めむと聖
母とす）通考の事と通考の事と通考の事と
康宣又康慕（通考）通考の事と通考の事と
助をひくと通考の事と通考の事と通考の事と
高祖と康慕助をひくと通考の事と通考の事と
人うとすの事と

○佛河通考

多毛毛國佛師の社を維えと油をとて南樂の
公司馬達等(まき止ともち)と三人; 佛體
體^體元^元十^年と^年於^於此^人も^も此^人も^も
佛^佛高^高く^くある^ると^と大^大和^和う^う市^市中^中の^の
多^多い^い禮^禮拜^拜せし^しう^うと^とも^もろ^ろこ^こし^しの^の神^神と
名^名づけ^け、佛^佛と^とま^ます^すと^とま^まむ^むか^かと^とま^まる^ると^とま^まる^る
が^がち^ちつ^つと^とま^まる^る達^達寺^寺の^の佛^佛の^のま^まと^とま^まる^ると^とま^まる^る
ま^まる^る佛^佛の^のま^まと^とま^まる^ると^とま^まる^ると^とま^まる^る
と^とま^まる^る佛^佛の^の神^神と^とま^まる^ると^とま^まる^ると^とま^まる^る
と^とま^まる^る佛^佛の^の神^神と^とま^まる^ると^とま^まる^ると^とま^まる^る
年^年六^六月^月九^九日^日滿圓^圓已^已と^と廟^廟一^一より^{より}内^内佛^佛

達寺^寺と^とま^まる^る初^初と^とま^まる^る由^由司馬^{司馬}達^達と^とま^まる^る薙^薙
多^多行^行本^本(司馬^{司馬}達^達と^とま^まる^る棄^棄權^權打^打主^主と^とめ^めす)と^と云^云
佛^佛像^像と^とま^まる^る用^用意^意多^多と^とま^まる^る以^以前^前の^の御^御丈^丈々^々而^而
して^{して}南^南都^都の^の佛^佛像^像と^とま^まる^る可^可能^能也^也。又^又金^金銅^銅扶^扶ひ^ひ
名^名多^多佛^佛、[、]馬^馬或^或止^止利^利此^此被^被作^作馬^馬。[。]馬^馬佛^佛の^の
言^言多^多多^多次^次と^とま^まる^るよ^よひ^ひ。

○陳和卿

東林遺稿

余は終日は在る別少佐達を送るが、
の觀音像と佛師傳より宋人陳和卿の心とある
陳和卿之壽永二年東大寺の佛首を鑄じ
其のままで在り。其事不思議也。名工で共其心と
新朝ももし御湯を賜へりしよ。心有れど血脈く漏
ますばうとせんべ。體爲御心持を守らざる如
つてかたのあひうす。御主は和卿とアマソ
シテよく出でたりてまた、さうときのすこゝ
子まゝ後々おもひだす。うあす別少佐先

建保四年六月八日、陳和卿菴著、是送東大寺佛
宋人也、彼寺供養之日、在大約家法縁法之次、可

被逐對面之由、類以虽被八年、和卿云、責客為多
令斬人余給之間、罪業惟重、奉值足有其據云
云、遂不謁申而於寺以仰可上所為、極化之耳、延也、
為衍恩教、企卷上之由申之、即被點、歲後左衛門
尉朝重之宅、為和卿旅宿、先令廣元朝臣尚子
細給、

十五日召和卿於御所、有御對面、和卿三爻奉拜。
故誣注以御家憚其禮給之處。和卿中三貴、
多私焉。昔為宋朝育王山長兄。于時毛列門弟云
此中去遠。賈元年六月三日丑刻。以御家御寢
之際。方始入。入御夢中。奉告此疏而拂夢。

主事、敢以不出御沟之更、及六個年、勿以符公
于和鄉中狀、乃御代仰之外多也也之
主朝者、一高王山長題莫不善也、或
多之、或少之、仁者立往而行之、與其子仲
子孫也、一高固之、多之、陳佛壽也、和鄉也、以
上五年十月十五日

○白石山房

従事す磨まき磨までもひらが、特ひよどります
で磨をほむる乾燥もとくまへひよどり、テモウ磨
まとまへひよどり、磨まき磨までもひらが、
みぶらうも、左の右のひよどり従事す年月もや

事事や生氣や能うるを計る。併多才實
才と能く羅いへる活動に余をあらはす、活動と
實をもれずの實力者とてうるべし、ちがつてののにシ
ウム、文献を微すべきをも大々の私を免へ
とく、材料のうこまきの代とすまし、所見を主
とすを在年代に於乾燥を拂ふ事もひき、
故にせひ十うたじの實更家と皆玉城の方に指
んとつとめのうこまきの拂ふ事もあらへ、其
味うそく、風味のうそくを拂ふ事も、一向もあ
れのうそくを拂ふ事も、泣く人おの拂ふ事も一而
刻くまで、如意度を拂ふ事もあらへ、其
や

人おとすまうとまふ念をもいへる、要くらうば
言も田舎のうそく、またひきまの和食家
ほえまとまつてゐるが、死んだえまう行到
もとを抱きまとい、トウセ34人の方もとあく
ひきのうそくを拂ふ事も、又おとすを拂ふ事も
あく又文家もうそくの實道徳を主張する者
く、うそく隨處此の流傳を行ふと時代也長い
のうそく、板の座卓をやつて居坐をちく、その上
ゆき舟を拂き、和室を拂ひ拂ひとぞ其の上
せつまきをうそくうそくうそくうそくうそく
うそくうそくは色徳をもつてゐるといふ事

2 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
3 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
4 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
5 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
6 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
7 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
8 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
9 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。
10 窓の外の風景を眺めながら、筆走る。筆走る。筆走る。

かくや既たうとうよけをも、全まくまよひままで
をまよひまくの魔女のもと、方魔女との材料を
もたらす。さくらを洗かりて病うる者へ化かすと
えむきをもつ、外史と漢書のまくまくの
歴史が人のちゆすをもとめてもうかくを
きり、うどんのふとまくの筋あわや、お上のわす
けはまくのゆりある、ゆくへよしきとあまくとも
まさんとまくまくひも、あまくまくのまくま
はあらうまんば俗語の指くわよ挿み、年さう
勢もあらうまんば俗語の指くわよ挿み、年さう
多めとまくまくまくまくまくまくまくまくまく

3、而う画ある腹より身を革縫たてて取らず
しく筋筋の胸よりは近所更衣としるとは押腕
また現在毛筆と陰陽と拂く也、毛石つとまよレ等
おもにそん處で風を吹きよ、終れば材料
おもてお詫び度ア一終れ御解支外の度ア止
タリの度支の材料と於いあつて是れは筋筋の筋筋
おもて腰体をもと毛石を拂ひ外交する爲め等
おもて毛筋を拂ひ度新ふす事多め此の筋を
筋筋又大關鍵をきくる有因の材料と之等ア
且つ白石と度支上の事多めり也、復と金定
おもてお詫び度新ふす事多め此の筋を拂ひ度

リしやう思ふ、三木有向不う度更衣を以て天井
臺をへること三木有向御定えをも天井し能
ハモムシ、又メイ、四木有向御定えをも天井
臺をへつた、又木有向天井をも天井し能
七角形有向天井をも天井し能、天井し能
併し天井を拂ひ度定えをも天井し能、天井
の天井を拂ひ度定えをも天井し能、天井し能
出ひぬもと天井し能、天井し能、天井し能
○天井、天井し能、天井し能、天井し能、天井
天井し能、天井し能、天井し能、天井し能、天井
天井し能、天井し能、天井し能、天井し能、天井
天井し能、天井し能、天井し能、天井し能、天井

のち、要するに直角一辺一辺を引いたり理想
の直角三角形をもつての角があるから、もう角の本
は直角三角形の範囲を打破し、新形を生じ
させゆる大うき手とせざるをす

○底多の江毛

まことに伊あは行ひし所里とて西長
の思おのぬ事あるに見えりとてはゆも、い
たゞ改めを御す一言を身爲むを仰あらうとま
むをかまの爲りて改めを爲すあらずとま
るの事多き様に、一・二・三・四・五・六・七・八
の事多き事に、一・二・三・四・五・六・七・八

それとあくまでも柱をねじり、四角の木を強化する
ということをもとに、主にアーチ型の
支承上部を多く取扱う事で、支承部分を
朝から暮まで忙しくお渡りレファインメント
ミキシング機械等へも、また、運送車等を
多くお預け下さいともいふ事で、佛徳のま
でも、一支撑の下に又二佛徳をもつて
てあるが、本家の意は、おもに、事務
を多くお預けする、主なは運送車のため
である。本家の車両をみて、その車体、そ
の構造、車輪の取付等をみると、車輪の取付

今が御事す事無事と、政体を定し既に御事
八度前後味改め未だ化き未遂御事今ま御事
化毛士の又ま未だ常の未全て御事御事御事
ハ事を生んは未事の御事御事御事御事
かくさん未だ味ひそく、この病也極も未と雖已
さううる事と心よりと云ふも、一代の風朝底
其餘味を高し、人間の冒美斯と有らし事
半身也御事御事御事御事御事御事御事
底を一見せよ而して御事御事御事御事御事
れを御事御事御事御事御事御事御事御事
あやえ人吉傳と御事御事御事御事御事御事

あらまを放ちとて仕事の形もあり、行ひ西
洋のへるをうけとる。方体のうつもとく、而且つ考の
滋味の絶せざるをえり、官やくは忙に済みたゞく、而
之をあらゆるに、身の世間情をうながし
重い底をえよとまづかしきが、済みゆの如の支那を
まづまづとすまづかしきが、沙汰のひりとえよの外

○書道の古事記

史記

○政體と名流

たの一々も済み難事多きに拘束せしもの、今
昔より古の支那歴史と對照して最難高談する所頗る
國が連合して、帶甲百萬旌旗天を蔽ひながら、一矢を放たばして退却せし處なれども、唐の灌闢となりて、驥駒狗の一號令に平地を行くより易く打破りたり、灌闢に續きて桃林塞、武王が殷紂を亡ぼして後、牛を桃林の野に歸し、馬を華山の陰に放つて云ひし此邊の事ならん、歸馬放牛は天下の太平を形容するの語、實はく、四億の民をして創痍悉く癒え周武の民の如くあらしめんと、

○「天子門前尙馬を走らすを容るす、華陰安、隋唐の二代其舊趾に據りて、天下を睥睨せり、涇渭澧澗の諸水其右を流れ、太華周の豐鎬の二都を置き、秦の咸陽、漢の長安、秦嶺の諸山其左を擁し、天險無雙と稱せられたれども、楚人の一炬憤むべし焦土たりとい秦の末路、漁陽の一鼓瀆關守を失して、翠華搖々蜀道の險を踏えて去りし、唐の玄宗あり、宜なる哉徳にありて險にあらむと。

清帝回鑾の順路と
歴史的感興

根岸の里人

「夜客あり清國の輿地圖を披き清帝回鑾の路次を信察して之を古の支那歴史と對照して最難高談する所頗る白く人をして皆仰歎慨せしむるものあり左に其要を識りて讀者の一發を博す。」

○抑も今回清帝の播遷せられたる西安の古
城九重門、不睹^{ハシナレバ}皇居壯^{ハシナレバ}安知^{ハシナレバ}、唐貢雍州の域にして、周以龍興、秦以虎視^スと、班固^{ハシナレバ}が西都の賦にうたはれ、山河千里固、城闕九重門、不睹^{ハシナレバ}王漁洋^{ハシナレバ}が未^{ハシナレバ}天子尊^{ハシナレバ}と駕賓王^{ハシナレバ}の詠^{ハシナレバ}ヒく近くハ王漁洋^{ハシナレバ}が未^{ハシナレバ}央宮闕悲歌裡、鄧杜鶯花淚眼中、已見銅人辭^{ハシナレバ}漢月、空留^{ハシナレバ}石馬、臥^{ハシナレバ}秋風^{ハシナレバ}と賦したる舊跡にて、歷代の興亡大半其附近に散在せり、

○「天子門前尙馬を走らすを容るす、華陰縣裏豈驥に騎るを得ざらんや」と大喝一聲縣令と叱咤せしハ、詩聖李太白にして、千載の下猶諦仙意氣の豪を説くものあれども、偶々以て長安天子の威權、華陰の一縣令に及ばざるを示すのみ、上の權下に遷りて終^{ハシナレバ}、

○灌闢を出れば四百州の胸腹たる河南省、閻鄉、靈寶二縣を経て陝州の州府あり、澗池、新安を過ぐれば河南府、河南府は古の洛陽にて、西へ崤函に跨がり、東へ淮潤に連なり南へ荆襄を経ひ、北へ燕趙に抗せし諸侯朝會の處と定めたるより、東周、東漢、西晉等の歷代^{ハシナレバ}に都し、嵩山の二山、穀の二水前後の襟帶たり、邙山^{ハシナレバ}の詩人の所

謂北邙にて偃師、華、孟津の三縣に連りて、
人の棺槨を埋むる所唐の沈佺期が
北邙山上列ニ墳塋一萬古千秋對ニ洛城一城
中日夕歌鐘たり、山上雜聞、松柏ノ聲、
世人間無常の感を起せしハ是なり、加之
洛陽ハ周末、漢末、西晉五胡と、帝居をこ
よに定めし時代、必モ亂離衰亡の歎速に相
伴ふを以て、古來憑弔の涙を灑きしもの幾
何ぞ、唐の安祿山の亂にも
洛陽三月飛ニ胡沙、白骨相擇テ如ニ亂麻ノ
と李白ハ痛恨の涙を呑たり、天下の中と雖
も要害の險長安に反ばざるの故か、何ぞ夫
れ古來兵馬の區クニであるや、婁敬が策を建て
る漢祖と勧め、都と長安にトせしめたる亦
理あり、

然れども支那の歴史上著名なる人物が多く河南一帶に出づ、關龍逢、伊尹、比干、微子啓、仲山甫、蘇秦、張儀、張良、陳平又は老子、列子、申不害、韓非、吳起の徒數ふるに追あらせ、邙山の傍に蘇秦の故宅あり、嵩山にいゝ鬼谷先生の遺跡あり、今日誰か其學と舌とを得て秦西列強の間に游説するものぞ、

京の天子長安に蒙塵し、駕と駐むる兩歳に
旦り、其間回鑾の議起りて阻止せらるゝ。乙
と幾度なるを知らず、想ふに潛善の如き小
人、君側に多からん、而して宗澤に似たる
忠勇の良將あるを聞かず、古今人心の變化
此の如きか、然らざれば歴史の記する所其
實に非るか。

○開封より黃河を渡りて北に向ひ延津、衛
輝、湯陰を過ぐれば彰徳府あり、彰徳府へ
古の鄆都にして、曹操銅雀臺を築き、大
喬小喬の二美人を吳に取て置んと欲せし處
なり、大喬は孫策の夫人、小喬は周瑜の妻、
曹操百万の兵を率ひて江を下りし時、吳の
諸將震懾して戰を欲せぞ、周瑜も亦逡巡決
せざりしに、孔明の智二喬の事を以て周瑜
を怒らしめ、終に赤壁の火攻となり、曹操
焦頭爛額僅かに身を以て免る、是れ演義三
國志の小説ならんも、周郎嫉妬の猛焰亦
るべし、唐詩の二首と以て証となす、

赤壁 杜牧
折戟沉沙鐵半消。自將磨洗認前朝。東風
不與周郎便。銅雀春深鎖二喬。(つまく)
○鄆都(今の彰徳府)の曹操によりて開かれ
たる後五胡の亂を経て石氏慕容氏等相次で
都とせり、曹氏の宮殿華麗を極めたる形容
の文選魏都の賦に譲り、こゝに唐の陸龜
蒙の詩一首を錄して石季龍の奢侈を証せん
鄆 宮 陸 龜 蒙
花飛蝶駭不愁人、水殿雲廊別置
春暎日靚粧千騎、女白櫻桃下紫綸巾
儕に云ふ石季龍常に女騎千人を以て齒道
どなし、紫綸巾熟錦袴を著けしむと、是れ
即ち別に春色を貯ふものにして、落花啼鳥
の歎を須ゐざれども、人生短促、興亡夢の
如し、何ぞ久しく恃ひに足らんや、やがて
野花黃蝶春風を領して、剩脂殘粉復覓
べからざるに至る、
○同じく魏都と云へども戰國時代の魏の士
梁に都そ、(孟子に所謂梁の惠王の魏王)即
ち今の開封府にして大梁と云ひ、鄆都と同
じからぞ、鄆都即ち彰徳府より北の直隸省

の磁州に接し、邯鄲縣に至る、此邊れ六國の趙なり、史に傳ふ、秦の昭王大軍を以て
趙の邯鄲を圍むや、趙授を魏に請ふ、魏晉
鄆を將として之を救はんと欲せしも秦に威
嚇せられて鄆に止まり敢て進まざ、魏の信
陵君けいりょうくん侯羸の計を用ひ力士朱亥をして賈
鄙を擊ち殺さしめ、其軍を奪ふて邯鄲の圍
を解き、楚燕趙魏韓五國の兵を連ねて秦軍
を追ひ函谷關に至ると、魯仲連が秦の禪義
を棄て首功を上ぶの國なり、もし肆然とし
て天下に帝たらば連々東海を踏んで死せん
のみと云ひしも此時なり、毛遂が劍を按じ
て楚王を叱咤し、五國合縱の約に従はしめ
しも此時なり、

○嗚呼今日の秦たるもの肆然として圓南の
志を逞うせんとし、四百餘州の運命邯
鄲の圍より急なり、誰れか東洋平和の爲め
に、魯仲連となり、毛遂があり、朱亥とな
り侯羸となる者ぞ、唐の王維此事を詠じて

○河南府より偃師、鞏、汜水、滻陽、鄭州中牟を過ぎて開封府、偃師縣の古跡毫々して滻陽の項羽の大軍漢祖を困しめ紀信の一死、縫に危を脱せしめたる處、漢清二百年の恩を蒙りて忠義祀信に似たる者幾人かある、

○開封府の古の汗梁にして五代及趙宋の都をる所、宋の大祖の始めて城を築くや、事を督する者先づ方形の圖を作り、圓割縱横井然秩序あり、大祖一覽墨、以て之を塗抹し、改めて圓形をあし、諸門の位置不整にして大に美貌を損せ、人莫意の在る所を解せしに、粘罕斡離不大軍を率ゐて奈襲し、轍を揚げ城を指し、是れ攻め易しと、砲を四隅に立てゝ一撃に摧破せり、是に於て始めて太祖の用意を知り得たりとぞ、創業の主たりし者何れの處にか、常人に異なりたるものあり、順治帝が朔漠不毛の僻隅より起つて、朱明の四百餘州を席巻そると、其子孫が四百餘州を擁して三千里外に蒙塵をると、同日にして論をべからざるなり

○陝西の華陰縣より河南省に入る處即ち
曲にして、漁洋の句に
　　黄河一曲流千里、太華居然落眼前
　　と云へるが如く滔々たる黄河北より來り
　　に向つて大屈曲を爲す、咸陽を繞りて來
　　渭水へこそに於て黄河に入る、それより
　　の南岸に沿ふて一千清里にして開封府に
　　り、所謂中原の地勢を占め、古代の歴史
　　著名なる遺跡の大半其中に在り、
　　◎登封縣の箕山にハ許由巢父の遺跡あり
　　偃師縣の首陽山ハ伯夷叔齊の餓死せし處
　　一ハ南面の尊も闢間流離の苦あるを視て古
　　の禪と受けざると喜び、一ハ亂臣賊子の口
　　を百代の後に接するを悲むべし、
　　◎宋の都汁梁ハ即ち今之開封府なり、金
　　曾て此處を陥れて徽欽二帝を捕へて去る
　　高宗新に應天府に於て即位す、宗澤忠勇
　　を守り、兵を募る百餘萬、高宗に奏して
　　梁に還らんことを請へども、潛善其成効
　　祐みて議を阻み、克復の機會を失せ、宗澤
　　爲めに憂憤して歿す、終に臨み一語の家事
　　に及ぶ無く、但河を過ぎんと連呼すること
　　三たびと、都人之を聞て慟哭をと、今又轟

君、公子爲^{メニ}贏、停^シ驃馬^ヲ、執^リ轡^ヲ、意恭^ニ
意愈下^フ、亥^ハ爲^ニ屠肆鼓^レ刀人^一、贏^ノ乃夷門
抱關^ノ者[、]非^ニ但慷慨有^ノ奇謀^一、意氣兼^ニ
將^テ身命^ヲ酬^ユ、臨^レ風^ニ刎^シ頸^ヲ送^ミ公子^ヲ、十
十^ノ老翁何所ソ求^ヘ

を失ふて衛に寓する時君に諷して歸國を勧めたる詞なり、瑣々分尾々々、流離之子との零落の有様と歎じたるなり、回鑾の途次其地を過ぎ其詩を誦すれば、君臣の感慨想ふべし、

○宋の徽欽の際金人其都汁梁(開封府)を
みて城下の温を爲すや、音質貢金一百萬

自ら刎ねて公子を斬り、其意氣の壯烈なる千歳生けるが如し、然れども終に高適の古大梁行に歌ひし如く、魏王宮殿盡、禾黍信陵、賓客隨、灰塵、……遺墟但有、狐狸迹、古地空餘草木、根、たるを免れむ、况んや國を擧げて一人憂國の士無きとや、河南省より山西省に跨る一帶の地、周の時代に於て前に、晋爾宋陳鄭後に至りて、韓魏趙、左傳、戰國策に記せる所の戰争、吳越を除くの外、大概此域内に於て起りし、六國と云ふも之に燕（直隸省）、齊（山東省）、楚（楊子江に瀕する一部）、秦の始皇帝の事業も六王畢りのみなれば、秦の始皇帝の事業も六王畢りて四海一なりと威張る程のものにあらず、詩經の式微々々、胡不歸、とい黎侯國都、開封府を南京となし、所謂中原に蟠踞

○宋の南渡以後金人大興府（今の北京）を中心へ銀五千萬両、牛馬萬頭、表段百萬匹及び中山河間太原の三鎮二十郡を割かんことを求む、然るに全都の財貨を括盡して金二十萬両、銀四百萬両を得るのみ、求むる所の幾十分の一なるを知らず、今日の清廷亦同一の運命に遇へり、歴史の繰り返をものなりとの之を謂ふ乎、

○其結局徽欽の二帝溯漠萬里風雪の中と檻致せられて、五國城中不歸の鬼となる、支那歷代の戒心すべき常に北方の強なり、須らく警醒をべし、然らざれば爾後或ひに徽欽の覆轍を踏むや知るべからず、

勧と途と概と途と勧す、而して金の末主守緒ハ元の大宗に攻められ開封府より東へ歸徳府に走り蔡州に遁れ、終に自經して死す、興亡眞に夢の如し。今や回鑾の途次、其殘山剩水登臨の感何如ぞや。

○金の末路元帥雀立、開封府に據りて元に降り、金の宰相宗室を殺そ、凶虐を恣まゝにせしが李伯淵のために刺殺せらる、元遺山其事を賦して曰く、

逆堅終當ニ鎗、縷分ニ揮レ刀今得ニ快ニ三軍ニ燃レ臍易ニ盡嗟何及ニ遺臭無レ窮古未ニ聞、京觀豈當ニ誣ニ翟義ニ袞衣自合ニ從ニ高勳ニ秋風一掬孤臣淚ニ叫断蒼苔日暮雲、

開封府ニ魏の大梁の昔ニよう實ニ多事なる處あり、今又清帝蒙塵ニ後暫く蹕を駐む、古今ニ俯仰して治亂の跡を考ふべし、(つゝく)

○邯鄲ニ盧生ニ炊の夢を以て著はれたるのみあらむ、呂不韋ニ邯鄲の美姫を秦の莊襄王ニ献じ始皇を生ましむ、實ニ己の子あり、漢の王莽の亂にト者王郎帝號をこゝに僭す、今ハ廣平府に屬して直隸の南門たり、

○ 潞州より順徳、正定、保定の三府を経て順天府即ち北京に達す。古の所謂燕趙にして悲歌慷慨の本塲と稱するも、今其面影を留めぞ。史記に曰く地方千里、帶甲數十萬、天府の國なりと、地勢を按せれば滹沱河其南を經し、恒山其北に峙ち、東へ渤海を控へ、西へ太行を拂し、形勢依然たれども人物の非なり。

○ 順徳へ正定の間に内邱、柏鄉、趙州、欒城の一州三縣あり、正定、保定の間に新樂、定州、慶都の一州二縣あり、保定より安肅、定興、新城の三縣を経て、涿州に接し、更に良鄉縣を過ぎて北京に入るへ順路なり。

○ 欒城より正定府に至る間に滹沱河あり、後漢の光武帝が王郎の兵に苦しめられたる處へ或は其上流か、舞臺亭の豆粥、滹沱河の夢寐長く艱難と記するの熟語となれり、正定府の西南に井陘の險あり、韓信背水の陣を布いて此處より入り趙歇、陳餘を獲たり、正定府へ即ち真定にして三國志に於て名高き趙雲の奮起、又涿州の側に劉備、張飛

○則天武后唐の天下を亂せし時、李敬業
兵を起して之を討つ、其檄に曰く、一杯之
士未だ乾かざるに、六尺の孤安くにかある
と、之を草せる者は騎賓王なり、賓王易水
送別に

○地入ニ臨州、白日沈、寒雲莽々水陰々、亦
知匕首無レ成レ事、只重荆棘一片心、

曰く

○新城～涿州の間に易水あり、即ち荊軻が
匕首を懷きて燕丹に別れし處、咸陽に至り
始皇を刺さんと欲し、事成らざと雖も千歳
の下懾夫をして立たしむべし、而して今回
の回鑾と其發着の路筋を同じうそるに至り
てハ更に一層の感慨を添へん、清人の詩に
の舊里あり、櫻桑村と云ふ、劉備漢の宗室
と称せるも、其實席を織り履を販ぎし一隣
夫、天下の亂を慨さて閭里に齧起し、終に
蜀漢五十年の祚と延ぶ、夫の萬乘の尊に居
り四海の富を有して、社稷の傾覆を致す者
と其差宵壤も啻ならざ、

此地別_レ燕丹_ニ、壯士髮衝_カ冠_ヲ、昔時人已沒_ニ
今日水猶塞_レ、
と賦したるい、李敬業を送りしにい非るか、
始皇を以て武后に比す、不倫に似たりと雖
も咸陽長安_一、目指す所_ハ相同じ、
○李敬業兵を起せし時武后年已に六十、身
に棺槨に臨みながら威福と擅にし、中宗
の位と廢して、唐の宗室を屠戮_モ、母后政
を執るの弊徃々此の如し、漢の武帝が、太
子の母鉤弋夫人の功ありて罪無きに、謹言
して曰く古へ國家の亂る所以_ハ、主少く
母壯にして驕淫自恣なるに由ると、終に死
を賜ひしり、殘忍の甚しきものなれども、
亦理無きにあらず、秦の始皇の母（所謂邯
鄲の美姬）も晩年太后となりて、呂不韋と
通じ姪毒を寵し、云ふに忍びざるものあれ
ども、始皇の驚愕能く之を制して、更に禍
を宗廟に及ぼさむ、若し始皇をして庸弱の
主ならしめべ果して如何、

Digitized by srujanika@gmail.com

○保定府の六國時代に於いて燕趙の境界なり、涿州の古へ八荒の輜輶、萬國の咽喉と稱し、所謂涿鹿の野に當り、黃帝蚩尤と戰ひ、勝ちて都する所なり。

○今之北京へ遼にあつて南京と稱し、金にあつて中都と稱し、元にあつての大都と稱し、明の太宗以後北京と爲す、古の燕にしきに據りて起り、長安と遙かに相對して、歴史上最も關係深き處とす。

○支那的天文家の説に云々天の子に開け、地の丑に開け、人へ寅に生れど、又曰く、寅は演なり、萬物の自りて演生する所ど、何の意味たるを解せざるも、寅の大に喜ぶ所なり、故に夏正建寅と云ふ事あり、而して洛陽を中樞とすれば、寅の方角い恰も燕京に當れり。

○されども邦人の俚諺に從へば、丑寅の一隅を鬼門と稱し、大に忌む、而して回鑾の順路の即ち鬼門に向へり、加之其處の支那と考ふるも、今年より明年にかけて丑寅と爲す亦奇ならむや、ことに至りて荒唐不稽の談も亦一種の妙味あり。

○所謂鬼門より打つて出でよ、中原を席巻する者古來數ふるに違あらず、愛親覺羅氏の創業も東北の盛京省より起りしなり、之に反して東北に向ひ志を得たるハ周秦の二朝、要せるに支那歷代の興亡、常に東北と西南(陝西)との爭闘にして古代の西南東北を壓し、近代の東北西南を壓す、斯く云はゞ露人が浦港を根據として瀋州と窺ふものが爲めかと問ふ者もあらん、呵々、

○唐の玄宗、禪山のため長安を陥れられて、蜀に幸するや李白詩を賦して曰く誰道君王行路難、六龍西幸萬人歡と、天寶の亂ハ唐室の危亡殆んど間髪を容れぞ、君臣の痛哭する所なり、其辭と美にして諷刺と中に寓する所なり、詩人の本色なりとす、亦甚しう云べし、此意を襲ふて今日の事を詠せば、如何ぞ

るべき時機の來れるを慶するのみ、(をはり)

九月十日
蒙古

蒙古

蒙古



